

又、おはします所も、一（ひとつ）には高天（たかま）の原と云（いひ）、二（ふたつ）には日の小宮（わかみや）と云（いひ）、三（みつ）には我日本（やまとの）国、これ也。

八咫（やた）の御鏡をとらせましまして「われをみるが如くにせよ」と勅（みことのり）し給けること、和光の御誓もあらはれて、ことさらに深（ふかき）道あるべければ、三所（みどころ）に勝劣の義をば。存ずすべからざるにや。

爰（ここに）、素戔嗚尊、父・母（かぞ・いろは）二（ふたはしらの）神に、やはられ（追放され）て、根（ね）の国にくだり給へりしが、天上にまうでて、姉の尊にまみえたてまつりて「ひたぶるにいなん」と申給ければ「ゆるしつ」と、の給。

よりて天上に、のぼります。大うみ、とゞろき、山・をか、なりほえき。此神の性（さが）たけきが、しからしむるになむ。

天照太神、おどろきましまして、兵（つはもの）の、そなへをして、待（まち）給。かの尊、黒（きたなき）心なきよしを、おこたり給ふ。

「さらば誓約（うけひ）をなして、きよきか、きたなきかをしるべし。誓約の中（なか）に女を生ぜば、きたなき心なるべし。男を生ぜば、きよき心ならん」とて、素戔嗚尊のたてまつられける八坂瓊（やさかに）の玉をとり給へりしかば、其玉に感じて男神（をがみ）化生し給。

すさのをの尊、悦（よろこび）て「まさやあれかちぬ」との給ける。よりて御名を正哉吾勝々（まさかあかつち）速日（はやひ）天の忍穂耳（おしほみみ）の尊と申（これは古語拾遺の説）。

又の説には、素戔嗚尊、天照太神の御くびにかけ給へる御統（みすまる）の瓊玉（にのたま）をこひとりて、天（あめ）の真名井（まなる）にふりすゝぎ、これを、かみ給しかば、先（づ）吾勝（あかつ）の尊うまれまします。

其後、猶、四はしらの男神、生（れ）給。

「物のさね、わが物なれば我子なり」とて天照太神の御子になし給といへり（これは日本紀の一説）。

此（この）吾勝尊をば、太神、めぐしとおぼして、つねに御わきもとに、すゑ給しかば、腋子（わきご）と云（い）ふ。今の世に、をさなき子を、わかごと云は、ひが事也。

かくて、すさのをの尊、なほ、天上にましけるが、さまざまのとがを、をかし給き。

天照太神、いかりて、天の石窟（いはや）にこもり給。国のうち、とこやみになりて、昼夜の、わきまへなかりき。もろもろの神達、うれへなげき給。

其時、諸神の上首（じやうしゆ）にて高皇産靈（たかみむすひの）尊と云（い）ふ神、ましましき。

昔、天御中主（あめのみなかぬし）の尊、みはしらの御子おはします。長（をさ）を、高皇産靈とも云（いひ）、次をば、神皇産靈（かむむすひ）、次を、津速産靈（つはやむすひ）と云と、みえたり。

陰陽二神（いんやうにしん）こそ、はじめて諸神を生（しやう）じ給しに、直（ぢき）に天御中主（あめのみなかぬし）の御子と云こと、おぼつかない（覚束な）し（此みはしらを、天御中主の御こと云事は、日本紀にはみえず。古語拾遺にあり）。

此神、天（あめ）のやすのかはの、ほとりにて、八百万（やほよろづ）の神を、つどへて相議（ぎ）し給。其御子に、思兼（おもひかね）と云神のたばか（謀）りにより、石凝姥（いしこりどめ）と云神をして、日神の御形（みかた）の鏡を鑄せしむ。

そのはじめ、なりたりし鏡、諸神の心に、あ（合）はず（紀伊国日前の神にます）。

次に鑄給へる鏡、うるはし（麗し）くましましければ、諸神、悦（よろこび）あがめ給（初は、皇居にましましき。今は、伊勢国の五十鈴の宮にいつかれ給（たまふ）、これなり）。

又、天の明玉（あかるたま）の神をして、八坂瓊の玉をつくらしめ、天の日鷲（ひわし）の神をして、青幣・白幣（あをにぎて・しらにぎて）をつくらしめ、手置帆負（たをきほをい）・彦狭知（ひこさち）の二神をして、大峽小峽（おほかひ・をかひ）の材（き）をきりて瑞（みづ）の殿（みあらか）をつくらしむ。

〈このほか、くさぐさあれどしるさず〉

其物、すでに、そなはりにしかば、天の香（かぐ）山の五百箇（いほつ）真賢木（まさかき）をねこじにして、上枝（かみつえ）には八坂瓊の玉をとりかけ、中枝（なかづえ）には八咫の鏡をとりかけ、下枝（しづえ）には青和幣・白和幣をとりかけ、天の太玉の命（高皇産靈神の子なり）をして、さゝげもたしむ。

天の児屋（こやね）の命（津速産靈の子＜或は孫とも＞興台産靈（こごとむすひ）の神の子也）をして祈祷（きたう）せしむ。

天の鈿目（うずめ）の命、真辟（まさき）の葛（かづら）を、かづらにし、蘿葛（ひかげのかづら）を、手襷（たすき）にし、竹の葉、おけのきの葉を、手草（たぐさ）にし、差鐸（さなぎ）の矛をもちて、石窟（いはや）の前にして俳優（わざをぎ）して、相ともにうたひまふ。

又、庭燎（にはび）をあきらかにし、常世（とこよ）の長鳴鳥（ながなきどり）をつどへて、たがひに、ながなきせしむ（これはみな神樂（かぐら）の起（おこり）なり）。

天照太神きこしめして、われ、このごろ、石窟にかくれをり。葦原（あしはら）の中国（なかつくに）は、とこ